

おおう自分、かくす自分
着装とレポートによる開示、呈示から自分を探る

学籍番号 12012002 秋藤有希

担当教授 立木茂雄

はじめに

1 先行研究より

- 1.1 過去における自分と自分
- 1.2 共同体の中の自分
- 1.3 自分を演出するということ

2 着装からみられる自分

- 2.1 写真から自分の着装情報を得る
- 2.2 写真から得られた情報結果
- 2.3 着装による自分の開示
 - (1) 2つの幼稚園
 - (2) 普段と異なった着装
 - (3) 中学、高校での着装
 - (4) 着装の一様性
- 2.3 着装による自分の呈示
 - (1) 幼少児期における着装
 - (2) 身体の露出
 - (3) 着装に込められた思い

3 レポートから見られる自分

- 3.1 方法
- 3.2 結果と考察

4 自分自身と向き合って

- 4.1 「着装」と「レポート」2つの材料から
- 4.2 自分らしさと繰り返す呈示行為

おわりに

参考文献 引用文献リスト

はじめに

「モノ」は必要とされるからこそ生み出され、そこに存在することを許される。そこで、「モノ」の存在理由を考え、調べることから人間に対する何か、大きくは社会事象などがあきらかになるのではないだろうか、という考えが長い間私の中にあった。その後、ゼミに参加するようになって、社会学というのはけして大きな範囲からだけにみられる学問ではなく、自分の身の周りという最もミクロな部分からも発生しうる学問であるということを実感することが多く、それまで社会学に対して大がかりな印象を抱いていた私にとって、このことが社会学の意識を大きく変える契機となった。そして、この意識変化をもって、社会学における最も身近な対象者である「自分」という人間を、「モノ」を調べることであきらかにすることも可能なのではないだろうかと考えるようになっていったのである。そのためには自分が主観的に、また客観的にも自分自身について何かを調べるというスタイルで、「自分」というひとりの人間の中に生じるコミュニケーションを意識的に見なければならぬ。以前チーム編成でやったプロジェクトの中で、レポートという「モノ」から無言の自己開示が見られるという発見をした。自分が作成した「モノ」によって、自分自身が無意識のうちに開示されている、ということに気づいたのである。レポート、もつといえば文章というのは文字から構成される2次元の自己表現ととれる最も身近な「モノ」であるが、これに対して3次元の自己表現となっている最も身近な「モノ」、それが被服を代表とする着装物ではないかと考えた。そこで今回、その着装物に対する行為を含めた着装全体を「モノ」として捉え、着装から「自分」がどのように開示されるか、また着装によって「自分」が表現、呈示していることはどのようなものなのかということ調べ、「自分」を探ることにしたのである。また、以前やったプロジェクトでの対象者を、前回自分を含めた数名の者においていたが、今回は自分自身のみを設定し直し、再びここで自分を探る材料としてとりあげた。着装とレポートという2つの身近な「モノ」からどのように自分があきらかになっていくのかを見るとともに、自分が自分自身について考えるということをテーマにこの論文は書き進められている。そして、多少の複雑な気持ちを胸に、これが大学生活における最初で最後の自己紹介文のようなものになればという思いをもって作成したことをここで付け加えておきたい。

1 先行研究より

1.1 過去における自分と自分

G.H.Mead (1934 = 1973) によれば、人はそれぞれ自己の両側面として I と Me の両方をもっているという。I と me は同一視されるが、記憶となった時点では I は me になる。ただし、過去が現在として進行しているとき、主体であった自己はまぎれもなく I としての働きをしていたことになる。また、記憶は「ついさっき」というものも含めて自分自身の身分証明となり、記憶のある一部が抜け落ちることがあれば、自分の内面を走る断層を除去してしまうようになる。自分にとって過去の意識がなければ自我はないものと等しく、自己の意識がなければ過去がないものともいえるという。また彼は、me である自己が確認されることで、他人と同じように自分自身とのコミュニケーションも存在するという点についても述べている。たとえば、牢屋に閉じこもって過ごす人などは自分が友達のようなものであり、他人とのコミュニケーションと同じように考え会話することができる。それだけでなく、他人と何か会話を交わすとき、自分が発した言葉を聞いて自分でその内容を再び解釈することとなり、その解釈をもって自分が自分に影響され、発言を変えるということも生じるのだという。自分の発言によって自分が違った角度からそれに影響され、さらには抑制されることもありうるということだろう。いや、発言によるものだけではない。どこか自分を客観視するような見方をすることで自分が自分に影響されることもあるだろう。そこで客観視できるのは常に過去となった自分であり、そんな過去の自分とコミュニケーションをとるのは自分次第で可能になるのである。そのコミュニケーションを行うことで、自分自身の開示を自らが知ることも可能になるといえる。

1.2 共同体の中の自分

共同体の中でコミュニケーションをとろうとするとき、自分が伝えたいことを他者により正確に伝えることがもっとも基本的であり大事なことであるといえよう。Mead (1934 = 1973) によれば、それぞれの思考にはシンボルがあり、身の周りのものにそのシンボルをあてはめることでコミュニケーションを円滑に進めているという。シンボルはある程度普遍的なものであり、そうでなければコミュニケーションは成り立たないとも彼はいつている。つまり、シンボルが自分に生じさせることを、他者にも生じさせることがコミュニケーションにとってもっとも重要であるということである。もちろんこれは今回とりあげ

た着装においても文章表現においてもいえることであり、はたして自分が呈示している通りに他人の目にうつるのであろうか、ということが今後も自分の中で考えられる点である。

また、Mead (1934 = 1973) によれば、衣服の流行に対してはじめは反対の意をあらわしていた人も、しばらくすると変化した流行の中に存在する自分自身について考えるようになり、最後にはそれを受け入れるということがあるという。また、このような過程が他人の行為を採用することであり、こうすることで共同体に属する意を表示することに通ずるというのである。共同体の中ではそれに順応することの方が楽であり、かえって心地よく感じるがよくあるように思われる。これは自分の存在する共同体に自らをささげたことになると考えられるが、ほとんどが無意識的に行われていることが多いのである。

1.3 自分を演出するという事

E. Goffman (1959=1974) によれば、劇場とそこで見られる演者たちのパフォーマンスに類似するものが、私たちの送る日常生活からも発見できるという。私たちは常に他者に対して何らかの演技をし、接する相手によってその演技を変えたりもする。そのとき、自分の演出に必要な舞台装置や小道具として、被服や生活雑貨を用いているのである。彼は外面についても言及しており、言葉使いや容姿、服装などは個人的外面としてとらえ、演者である個人がどこへ行ってもつきまとうものであるために、これらは非常に重要なものとして位置づけられている。

また、個人プレイだけではなく、このパフォーマンスはチームが一体となって行われるものもあるとされる。ここでは異なった役者が同一の外面をとることで、抽象的なものをまとめ、そのことによって劇場とされる生活空間に安定性をもつことができるという。

日常生活における演出というのは、一般でいう呈示行為にあたるわけであるが、呈示行為をする際には二極される「場合」があるという。ひとつは、自分自身の行為に「欺かれる場合」(Goffman 1959=1974: 21)、つまりは自分の呈示行為を現実のものであると信じこんでいる場合と、もうひとつは、自分自身の行為に「醒めている場合」(Goffman 1959=1974: 21)、つまりは他人を欺くために呈示行為をしている場合である。前者の場合には自分を見失っているということも考えられ、自分自身はそれを呈示行為であるとは気づかず、他者と同じように自分自身に呈示されているということになる。「自分はこういうものである」という思い込みがこのようなことを生んでいるのである。このようなことをあきらかにするために自分自身を客観的に見直すことが重要ではないかと思われる。

2 着装からみられる自分

2.1 写真から自分の着装情報を得る

自分の着装から「自分のどのような開示があるのか」、「自分が行った呈示がみられないか」ということを探ることを目的とし、これを進めるためのデータ材料として、0歳から22歳までの自分の存在が確認できる写真、計97枚を使用した。写真の中に写された自分というのは過去の自分の姿そのものであり、とくに着装のようなものからは外面的な部分が見えやすいといえる。また、「自分を客観的にみることができる」という点で写真は非常に有効な材料であると考えられる。

まず、写真の収集からはじめ、ひとつひとつデータ材料として使えるものか否かを選別した。その際には、いろんな状況における自分の着装について見られるように、「同じような着装で、同じ場所において、同じような人々に囲まれている」というような、おそらく同日に同じ状況でとられたものだと考えられる写真はデータ材料の対象外として除外した。しかし、「同じような着装をしていても、場所は異なる」というような写真はデータ材料として取り入れた。このようなデータ材料の選別ができた後に、これらを使ってデータ作成に取りかかった。データ材料とされた写真それぞれにNo.をふりあてた後、写真を見ることでわかるさまざまな情報、とくに着装物については詳しく表記し、これらをまとめて表にしたものをこの調査の大きなデータとした。着装物以外の情報としては、写真がとられた時の自分の年齢、その写真がどこでとられたか、写真にうつっている自分のまわりの人物、まわりの人物との服装の一樣性の有無などがあげられる。こうして作成されたデータを使って分析するにあたり、まず行われたことはデータの中から何らかの類似性や差異がないかを見つけ出すことであった。そして、「類似性がみられた理由は何か」、「差異があらわれた根拠はどこにあるのか」ということを探ることで、自分にまつわる事実的事象や内面的特徴を発見することにつながった。また、これらの発見を得るためには過去の先行研究結果と同等に「自分の記憶」がここで非常に重要な手がかりとなるために「記憶をたどること」も分析を進めるにあたって大きな要素となった。

2.2 写真から得られた情報結果

2.1の方法により得られた情報をまとめたものが以下の表1である。

表 1 写真情報

年齢 ¹⁾	写真 No.	場所	周りの人物	一様性 ²⁾	着 装 物
0 歳	0-1	家の中			半袖つなぎ(ピンク・白)
	0-2	公園	兄・母		長袖(白) つなぎ(黄)
	0-3	家の中	兄		半袖(白地・ピンク柄) つりズボン(ピンク)
	0-4	家の中			半袖つなぎ(ピンク) 前かけ(白地・ピンク柄)
	0-5	家の中			つなぎ(白地・赤柄)
2 歳	2-1	神社	兄		長袖ポロシャツ(白襟・黄地・ワンポイント) つりズボン(赤 ×黒チェック) 靴下・くるぶし丈(白) 靴(白地・赤ライン)
	2-2	祖父母宅の前	伯母		袖なし(白) スカート(ピンク) 赤×白サンダル つりカ バン(薄緑地・キルト) 髪飾り(赤玉)
	2-3	家の中	兄		浴衣(ピンク地・柄) 髪飾り(赤リボン)
3 歳	3-1	家のベランダ	兄		長袖シャツ(赤チェック) つりズボン(ジーンズ)
	3-2	家の中	兄		長袖(赤) つりスカート(ジーンズ) ポシェット(赤紫)
	3-3	神社	なし		振袖着物(白地・花柄) 草履(赤・白) 髪飾り(花)
	3-4	学校のグラウンド	生徒の保護 者など多数		長袖シャツ(赤チェック) つりスカート(ジーンズ) 麦藁 帽子 ポシェット(赤紫地・毛糸) 靴下・膝丈(白) 靴(赤)
	3-5	家の中	兄		半袖Tシャツ(水色) つりスカート(赤紫・ワンポイント)
	3-6	家の中	兄		長袖(赤紫チェック) つりスカート(ピンク)
4 歳	4-1	道路の特設会場	幼児多数		長袖セーラー服(白地・黒ボーダー) 名札
	4-2	ゲームセンター	祖母・兄		袖なしワンピース(ピンク・ワンポイント) 半袖Tシャツ(白)
	4-3	道路	いとこ・兄		袖なしワンピース(赤チェック・レース) サンダル(白・キ ャラクター)
5 歳 (幼稚園)	5-1	会議室	小学生多数		袖なし(黄)
	5-2	動物園	祖母・母		半袖Tシャツ(白地・キャラクター) つりスカート(ピンク) 靴下・くるぶし丈(白地・レース) 靴(赤)

	5-3	駐車場	父・父の同僚数名	ジャンパー(黄地+赤) 長袖シャツ(白地・襟にレース) ジャンパースカート(黒) タイツ(黄) 運動靴(黒地・白ドット)
	5-4	ホール座席	園児・保護者多数	ドレス(ピンク) カーディガン(ピンク) 髪飾り(レース)
	5-5	公園	園児・保育士・園児の保護者多数	長袖シャツ(白) つりスカート(青緑) 靴下・くるぶし丈(白・レース) 靴(白・キャラクター) 麦わら帽子 つりカバン(黄) 水筒(赤・キャラクター) 名札
	5-6	家のルーフトラス	なし	長袖シャツ(白) つりスカート(青緑) 靴下・くるぶし丈(白・レース) スリッパ(水色・キャラクター) 麦わら帽子 つりカバン(黄) 名札
	5-7	幼稚園のグラウンド	母	ブレザー上下・(青緑) 長袖シャツ(白) 靴下・膝丈(白) 靴(白) 名札
	5-8	幼稚園のグラウンド	園児多数	体操服上下 赤白帽 靴下・くるぶし丈(白・レース) 靴(白)
	5-9	幼稚園のグラウンド	園児・保護者など多数	浴衣(白地・赤柄) 下駄(赤) ネックレス(赤)
	5-10	幼稚園の教室	園児多数	長袖シャツ(白) ベスト(薄緑・ワンポイント) スカート(青緑) 靴下・膝丈(白) 紙で作った耳のようなもの(白)
6歳 (幼稚園)	6-1	神社	園児数名	長袖シャツ(白・襟に刺繍) 長袖スモック(ベージュ) 靴下・膝丈(白・リボン) 名札
	6-2	幼稚園のグラウンド	園児・保護者など多数	半袖スモック(水色) 靴下・膝丈(白・白リボン) 体操ズボン(紺) 靴(白) 帽子(ピンク×白) 名札 交通安全バッジ
	6-3	幼稚園のグラウンド	母・園児・園児の保護者など多数	体操ズボン(紺) 靴下・膝丈(白・白リボン) 靴(白) 帽子(白×ピンク)
	6-4	舞台	園児多数	長袖(白) ゴミ袋(黒・テープの飾り) 手にはめた靴下(黒) 靴下・膝丈(白地・柄) 紙で作った耳のようなもの(茶)
	6-5	公園	兄	長袖ワンピース(ピンク) 靴下・膝丈(白) 靴(黒)
	6-6	公園	父・母・兄	半袖Tシャツ(白地・カラ) キュロット(ピンク) 靴(黒)
7歳(小1)	7-1	小学校の玄関	同級生	ブレザー・制服(紺) 長袖シャツ(襟にレース) スカート(グレー) タイツ(白) 靴(黒×赤チェック) 通学帽(黄) 胸元の花 髪飾り(白リボン)

	7-2	舞台	同級生		長袖シャツ(白・襟にレース) ジャンパースカート(黒) タイツ(白) 靴(黒×赤チェック)
	7-3	幼稚園	同級生多数・担任教師		長袖シャツ(白) ブレザー・制服(紺) 赤白帽
	7-4	ホール楽屋廊下	生徒数名		ジャケット(赤地・金ライン) パンツ・五部丈(黒地・銀ライン) タイツ(ピンク) パレエシューズ(ピンク・リボン) 帽子(赤地・金ライン・羽)
	7-5	河川敷	兄・いとこ		半袖ワンピース(緑×黒チェック) 靴(ピンク・白リボン)
	7-6	神社	父		振袖着物(青地・金ノ赤ノ柄) 草履(金) 髪飾り(花・かんざし) かばん(金)
	7-7	祖父母宅の前・道路	兄		セーター(白・ファー) スカート(グレー・プリーツ) 靴下・膝丈(赤地) 靴(白・黒紐) ポシェット(黒地・キャラ)
8歳(小2)	8-1	砂利道	兄		袖なしワンピース(白地・ピンクドット) 靴下・くるぶし丈(白・折り返し部に柄) 靴(白)
	8-2	丘の上	いとこ		半袖Tシャツ(白地・キャラクター) キュロット(柄) 靴(白)
	8-3	音楽教室	生徒多数		セーター(ピンク・キャラクター) スカート(グレー) 靴下・膝丈(白地・ピンクライン・キャラクター)
	8-4	河川敷	なし		長袖シャツ(白) カーディガン(グレー) スカート(グレー) 靴下・膝丈(グレー・白) 靴(白)
9歳(小3)	9-1	舞台	生徒多数・保護者		チュチュ(水色・спанコール) タイツ(白) トゥシューズ(ピンク) 髪飾り(ティアラ・銀)
	9-2	公園	同級生多数・担任教師・校長		ジャンパー(緑・グレー・ワンポイント) ヘアバンド(グレー)
	9-3	祖父母宅	母・兄・いとこ		長袖(緑・絵文字) 半ズボン(カーキ) 靴下・膝丈(緑) 靴(緑・黒紐)
10歳(小4)	10-1	公園	同級生多数・担任教師		長袖シャツ(水色) 通学帽(黄)
	10-2	舞台	生徒数名		チュチュ(白・спанコール) タイツ(白) トゥシューズ(ピンク) 髪飾り(ティアラ・銀)

	10-3	小学校教室・黒板前	同級生数名		長袖(茶・リボン) ズボン(緑) ヘアバンド(青)
	10-4	舞台	なし		長袖シャツ(白・襟に赤ライン) ジャンパースカート(黒) リボン(赤・柄) 靴下・くるぶし丈(白・レース) 靴(黒・ エナメル・ストラップ)
11歳(小5)	11-1	砂浜	同級生多数・担任 教師・その他教師 数名		半袖シャツ(青・柄) 半ズボン(オレンジ) ヘアバンド(グレー)
	11-2	食堂	同級生多数・教師		体操服 半ズボン(オレンジ) ヘアバンド(グレー)
	11-3	山頂	同級生多数・副担 任教師		スキーウェア(黄色・黒襟) タートルネック長袖(白) 帽子 (黒)
12歳(小6)	12-1	銅像前	同級生数名・海女 さん		長袖シャツ(水色) 半ズボン(水色) 靴下・くるぶし丈(白) 靴(白・黒紐) 通学帽(黄)
	12-2	古墳前	同級生多数・教師		長袖(ピンク・青) リュックサック(茶) 通学帽(黄)
	12-3	遊具の上	同級生多数		長袖(水色・キャラクター) 半ズボン(水色) ヘアバンド(青)
	12-4	小学校の教室前	同級生多数		体操服 ブルマ(えんじ)
13歳(中1)	13-1	学校のグラウンド	同級生数名		浴衣(白地・紺/桐・校章柄) はちまき(黄)
	13-2	家の中	なし		半袖ポロシャツ(紺) キュロット(ベージュ)
14歳(中2)	14-1	動物園前	同級生		袖なしワンピース(水色) サンダル(白)
	14-2	ロビー	同級生数名・教師		Tシャツ(白地・キャラクター) ジーパン
	14-3	学校の教室	同級生数名		ジャージ上下(紺)
	14-4	学校の音楽室	クラブ部員数名		長袖セーラー服(紺) 上靴(えんじ)
15歳(中3)	15-1	学校のグラウンド	同級生・その他生 徒・生徒の家族等		体操服 ベスト(緑) スカート(黄地/オレンジ・緑ライン)
	15-2	旅館の部屋	同級生		半袖Tシャツ(黄地・青イラスト) ジャージパンツ(紺)
	15-3	同級生の家の前	同級生数名		セーター(赤紫地・水色ドット) ジャージパンツ(紺)
	15-4	遊園地	同級生数名		セーター(赤紫地・水色ドット) スカート(ジーンズ) 靴下・膝丈(黒) 靴(茶)
16歳(高1)	16-1	炊事施設	同級生多数		体操服 ジャージパンツ(紺) 髪飾り(花)
	16-2	池の前	同級生		半袖セーラー服(白/紺) 靴下・膝下丈(白)

17歳(高2)	17-1	倉庫	同級生数名、施設 の役員	体操服 カーディガン(紺) ジャージパンツ(紺) 運動靴(白・紐)
	17-2	砂浜	クラブ部員数名	半袖シャツ(水色地・柄・紐) スカート(茶)
	17-3	学校のグラウンド	同級生数名・その 他生徒多数・来賓 客	体操服(ゼッケン) 靴下・膝下丈(白) プルマ(紺) 運動靴(白・紐) はちまき(緑)
	17-4	学校のグラウンド	同級生数名・その 他生徒多数	浴衣(白地・紺/桐・校章柄) 紐(赤) 扇子
	17-5	学校の廊下	クラブ部員数名	長袖セーラー服(紺) ハッピ(赤)
	17-6	遊園地	なし	長袖シャツ(白地・柄) 長袖(水色) ベスト(茶) スカート(オレンジ) 靴下・膝下丈(白)
	17-7	小学校中庭	なし	長袖(赤) スカート(紺) 靴下・膝下丈(薄緑) サンダル(白) かばん(黒・エナメル)
18歳(高3)	18-1	学校のグラウンド	同級生・その他	レオタード(青) 腕輪(銀)
	18-2	学校の廊下	クラブ部員多 数・顧問・卒業生	トレーナー(白) ジャージパンツ(紺) デザイン風船 ワッペン 上靴(紺)
	18-3	家庭科室	同級生の家族	トレーナー(白) ジャージパンツ(紺) ワッペン 靴下・膝下丈(白) 麦藁帽子 風呂敷
	18-4	学校の通路	同級生、教師	長袖セーラー服(紺) ストッキング フリップ
	18-5	コンビニ	同級生	コート(紺) マフラー(緑)
	18-6	学校の教室の窓	同級生	ジャージ上下(紺) マフラー(緑)
	18-7	家の駐車場	なし	セーター(ベージュ) ジャケット(茶) パンツ(黒) 靴(黒) マフラー(赤)
20歳(大1)	20-1	展示会場	なし	コート(カーキ) スカート(柄/青・白・ピンク・黒) マフラー(黄)
	20-2	ビルの屋上	同級生数名	留袖着物・訪問着(赤紫地・柄) 羽織(ピンク) 足袋(白) 草履(金・赤・白)
	20-3	歩道	なし	セーター(白) ジャケット(オレンジ) スカート(茶) マ フラー(黄) タイツ(緑) 靴(緑・ヒール) かばん(薄緑)

21 歳(大2)	21-1	道路	同級生数名・その他多数	半袖ワンピース(オレンジ地・柄) かばん(ベージュ) 帽子(白地・黒ボーダー)
	21-2	大学の教室(舞台)	サークル員数名	長袖ワンピース(黄緑地・柄) タイツ(黄緑)
	21-3	出店	同級生・他数名	コート(グレー) マフラー(薄紫)
22 歳(大3)	22-1	喫茶店内	同級生数名	長袖シャツ(水色)
	22-2	宿泊施設・大広間	サークル員多数	袖なしワンピース(水色) カーディガン(薄茶)
	22-3	大学構内の階段	サークル員	ジャンパー(青緑) パンツ(黄) 靴下(黒) 靴(白・赤紫 /グレー紐) マフラー(黄) 帽子(水色・毛糸編み)
	22-4	大学の教室(舞台)	サークル員	長袖(青緑) レース上着(ピンク・柄) スカート(緑・柄) パンツ(グレー) タイツ(ピンク) 靴(茶・ヒール) 腕輪(金)
	22-5	大学の教室	サークル員多数	長袖(青緑) スカート(緑・柄) パンツ(グレー) タイツ (ピンク) 靴(茶・ヒール)
	22-6	大学構内	サークル員数名	半袖Tシャツ(ピンク・紺イラスト) 長袖(薄緑) スカート(茶・黒) パンツ(グレー) タイツ(茶・白/柄) 靴(茶・ヒール)
	22-7	大学の教室(舞台)	サークル員数名	長袖(こげ茶) スカート(茶) ストール(白・黒/毛糸編み)

注

- 1) 収集した写真は0歳から22歳のものとしているが、そのうち1歳と19歳のときの写真は所在確認が不可能であったので今回はこの2つの年齢は分析できなかった。
- 2) ここで 印をつけられているものが一様性が見られたものである。

2.3 着装による自分の開示

自分の身をまとう着装物は、もはや自分の所有物を越えて、一見して自分自身の一部であるように思える。自分自身の一部と貸した着装物、またそれによる着装行為はどのようなものでも何らかのメッセージ性をもっており、それを見ることでその着装行為の主体となる人物の情報を知ることができる。今回その着装の主体となるのは私自身であり、その情報を知るのも私自身である。私が私自身と着装という媒体でコミュニケーションを取り、

着装から開示される自身もつ情報を知ろうというのがこの節での目的である。その開示は着装全体から確認されることもあり、着装物ひとつから確認されることもあった。それらについて以下に詳しく述べていくことにする。

(1) 2つの幼稚園

私は父親の仕事の関係で今まで計8回の引越しを経験しており、そのせいで幼稚園を1度変わり、小学校においては3回も転校している。このとき、それぞれ通った幼稚園を、幼稚園 a、幼稚園 b、またそれぞれ通った小学校を、小学校 a、小学校 b、小学校 c、とする。小学1年生の時に通っていた小学校 a では何かの行事の時のみに制服としてブレザーの上着を着用するという方針であったが、そのあと通った小学校 b、小学校 c では私服のみで通学していたため写真からみられる着装からどの小学校に通っていたころのものか、ということを開示することは可能であった。ところが、a、b、c、どの小学校でも通常の生活では私服を着用していたため、その写真が小学1年生から6年生までの、いつの時期のものであるかを着装物のみで判断する、というのは正直難しかったといえる。

しかし、幼稚園では体操服も含めて日常的に制服着用が義務づけられていたため、その写真が幼稚園 a の時のものなのか、幼稚園 b のものなのかを着装により判断することが小学校の時と比べて容易であった。それと同時に、このことは私が2つの異なった幼稚園に通ったということを開示することとなる。

写真 5-7、写真 6-1 ではともに幼稚園での春学期、および秋学期の制服を着ていることがわかる。写真 5-5 ではかっちりとしたブレザーの上下を着ているが、写真 6-1 では体操ズボンにスモックというラフなものを着ている。ここから両者がニュアンスの異なる制服を着用しているということがわかる。そのために写真 5-7、写真 6-1 が異なった時期のものであること、また、私が幼児期に2種類の異なった幼稚園に属していたということが開示されることになる。写真 5-5 と写真 6-2、写真 5-8 と写真 6-3、写真 5-10 と写真 6-4 を並べて見ても同じことがいえ、それぞれについて以下に述べていくことにする。

写真 5-5 と写真 6-2 は、ともに夏学期の制服を着用したものである。これも写真 5-7、写真 6-1 と同じように、ニュアンスの異なる制服を着用していることが、別々の幼稚園に通ったということを開示することに導いている。写真 5-8 と写真 6-3 においては着装物自体より、その着装物をどのように着ているのかということが注目すべきところとなる。写真 5-8、写真 6-3 どちらも体操服を着用していることがわかるが、写真 5-8 では体操服

を上下とも着用しているところ、写真 6-3 では上半身は何も身につけていないことがわかる。写真 5-8、写真 6-3 でそれぞれ身につけている着装物からは、先ほどのようにニュアンスの違いというようなものは見られないが、このように着用スタイルが異なることで、異なる幼稚園に通ったという事実気づくことが出来る。写真 5-10 と写真 6-4 では、どちらも劇をやるうえでの演出のために動物をイメージしてつくったものを身につけている。この点で一見同じような着装をしているようにも見えるが、よく見てみると写真 5-10 では動物の耳をモチーフにしたものとベスト以外は制服で固められ、品よく、きちんとした身なりに見えるように心がけているのではないかと、思わせる部分がある。これに比べて、写真 6-4 を見ると、着装物に「靴下」と「ゴミ袋」があることが確認される。ここでいう「靴下」は、手にはめている靴下のことである。新品のものならまだしも手に靴下をはめる、というのは、やや品位に欠けた行為であるが、園児自らが自分の衣装をデザインしたり、通常ゴミを入れるための袋に自らを投入することで着装が成り立つという非日常的な行為は、非常に独創的で自由な校風が感じられる。このような点でも写真 5-10、写真 6-4 両者の違いが見えることとなり、このことで 2 種の幼稚園に通っていたという私の開示ができることがわかる。

写真 5-7、写真 5-5、写真 5-8、写真 5-10 が、つまり年齢でいえば 5 歳のときのものが a 幼稚園に行っていたときのものであり、写真 6-1、写真 6-2、写真 6-3、写真 6-4 が、つまり 6 歳のときのものが b 幼稚園に行っていたときのものであるが、これらを総合して見ても、はっきり 2 つの幼稚園での着装の違いがわかるだろう。このことで幼稚園のもつ方針のようなものも少し見え、幼稚園側の開示もできることがわかる。ただし、ここでいいたいのは、どちらの幼稚園での着装が良くて、どちらが悪いというようなことではなく、重要なのはこの着装の違いから私がどのように開示ができたかということだ。もしも、幼稚園側の開示をあわせもっていうとしたら、それは私が「きちりとしたイメージをもつ a 幼稚園」に通っていたということ、「自由奔放なイメージをもつ b 幼稚園」に通っていたこと、そして 5 歳と 6 歳とでは別の幼稚園に通っていたということが開示できるというようなどころであろう。

(2) 普段と異なった着装

今回収集した写真の中に、普段ではあまり見られない着装だと思われるものもいくつか確認された。そして、その着装を見ることによって、写真にうつっている当時の自分が、

どのような状況におかれていたのかということも開示されることがわかった。

写真 3-3 の着装物は振袖着物であったり、草履であったりと、日常生活のほとんどを洋服の着装で過ごしていた私にとって、それらの和装が普段着であるとは考えられにくい。そこで、歳が 3 歳、うつされた場所が神社、ということを見ると、これが「七五三のお参り」の様子であったことがわかる。写真 7-6 もこれと同じ要領で「七五三のお参り」の様子がうつされたものだということがわかる。写真 5-9 の着装物はゆかたに下駄というようにここでも普段見られない和装が確認された。うつされた場所が幼稚園のグラウンドで自分以外の園児からも着装の一樣性が見られるところから、何か幼稚園での行事、それもゆかたを着用しているという点で夏の行事であることがわかる。よって、おそらく園での盆踊りか何かに参加していたものではないかと考えられる。写真 13-2 と写真 17-4 の着装物にもゆかたが確認されたが、これもうつされた場所が学校のグラウンドであり、一緒にうつっている同級生の着装からも一樣性がみられることから、学校の何らかの行事があったことがうかがえる。他に和装の着装物が確認されたのは写真 2-3、写真 20-2 であるが、これらは上記のように何かの行事に参加するためになされた着装ではないことがわかる。写真 2-3 の着装物にはゆかたが確認され、兄との着装からも一樣性が見られたので、一見してこの写真が撮影された後にどこかの祭にでも行くようにも見える。しかし、ゆかたの素材の感じを見ると、外出着であるとは考えられにくく、おおよそ家の中で寝具として着たものではないかと判断できる。また、写真 20-2 の着装物では留袖着物と草履が確認され、一緒にうつっている同級生の着装にも一樣性が見られるが、これも何か特別な行事に参加したというものでもない。このことに関しては後の「2-3 着装による呈示」で詳しく述べることにする。

写真 7-4 では、金ライン入りのジャケット、銀ライン入りのパンツ、そして羽つき帽子、というように普段着とは思えない着装が確認される。これはバレエの衣装であるが、それに加えて、通常レッスンでは、履くことのないリボンつきのバレエシューズも確認される。そのことにより、ここでバレエの発表会がおこなわれたのだということがわかる。また写真 5-4、写真 9-1、写真 10-2 の着装物にもチュチュなど普段着ないバレエ衣装があげられるために同じことがいえることとなる。写真 7-2 では着装物に、えりにレースがあしらわれた長袖シャツや、きっちりとした印象のある黒のジャンパースカートなどが見られることから何か緊張感のある行事などがそこであったのではないかと意識させられる。うつされた場所が舞台であり、写真にはグラウンドピアノも確認されるため、このこと

で私の着装がピアノの発表会に参加するためにした着装なのだとということが認識できる。写真 10-4 の着装も正装着を思わせるものであり、写真 7-2 と同じ要領で自分がピアノの発表会に参加していたことがわかる。写真 7-2、写真 10-4 はともに私がピアノの独奏をしている様子うかがえるものであるが、同じようにピアノの独奏しているものとして写真 8-3 があげられる。しかし写真 8-3 の着装物を見るとセーターにスカートという普段着で、写真 7-2、写真 10-4 の着装とはまったく異なるものであることがわかる。写真 7-2、写真 10-4 と同じようにピアノを弾いている姿は確認されるが、このような着装の違いから写真 7-2、写真 10-4 と写真 8-3 とでは異なる状況におかれていたということがわかる。

また、以上の写真 5-11、写真 7-4、写真 9-1、写真 10-2、そして写真 7-2、写真 10-4、写真 8-3 から私が過去にバレエとピアノという習いごとをしていた、ということも開示されることになる。

写真 4-3 の着装物にサンダルが確認されるが、このサンダルは私専用のものとして祖父に買ってもらったものであり、これが祖父母の家においてあったことから、この写真が祖父母の家に行ったときのものであるということがわかる。また、このことはうつっていた場所からも強い信憑性をもってさらに確認された。写真 5-6 の着装物からは、つりスカートや麦わら帽子など幼稚園の制服と思われるものと、そのほかにスリッパが確認される。スリッパを履いていることだけでも通常の幼稚園での着装ではないことがわかるが、それに加えて場所がルーフテラスであることから、この写真が幼稚園での生活を記録したものではないことがわかる。写真 11-3 の着装物にスキーウェアなど防寒着があげられるが、当時私の住んでいたところは極寒地域ではなかったため、この着装が普段とは異なる着装であることがわかる。また、場所が山頂であるものの、スキー場とはまた異なった場所であるため、耐寒遠足のような行事に参加した時のものであることがわかる。写真 17-5 の着装物には制服とハッピーがあげられる。場所は学校の廊下であるので制服のみの着装であれば、学校での通常風景ととられるが、ハッピーを着ているためにそうでないことがわかる。また、他にうつっている生徒の着装からも一様性が見られるため、学校での何らかの行事がそこであったことがわかる。写真 4-3、写真 5-6 は着装物からだけでも状況の把握は充分できるものの、うつっている場所を見ることで自分が認識したことがらの正誤をきちんと確かめることができる。写真 11-3 においては着装物だけではスキーに行ったのかもしれないという判断もできるし、また写真 17-5 でも着装物だけでは祭へ参加、もしくはどこかの商店の手伝いをしたのか、というようなことも考えられよう。しかし、場所がそれに見合うも

のではなかったために他の状況を考えることに導いたことになる。このように着装物のみではなく、着装物と場所をあわせもって見ることで正確な状況が把握できるものもあることがわかった。

(3) 中学、高校での着装

15歳から18歳まで中高一貫校に通っていたために、6年間同じ制服、または体操服などの指定された着装をしているために、学校生活の中でうつされた写真を見ると、それが中学の時のものなのか、高校の時のものなのか、すぐに判断するのは難しいものもあった。しかし、着装物が持つ少しの情報が手がかりとなって、それらの判断が可能になったものもある。学校によってはそうでない場合もあるかもしれないが、学校生活を送るうえでは、着装についての規正というものがあることが多い。いわゆる校則などがそれにあたる。少なくとも私の通った学校にはそういうところが多く見られ、それが今回の色々な開示の手助けになったともいえる。それでは、それについての詳細を以下に述べていくことにする。

写真 14-3 の着装物にはジャージの上下が確認されるが、これは学校指定のものであり、高校にしてもデザインは同一である。よく見ると、胸にピンク色の糸で学校名が刺繍してあることがわかるが、これはその年の中学2年生と高校2年生だけに見られたものである。この刺繍にはピンク色、青色、白色の3種類あり、3学年離れた学年がともに同じ色の刺繍がされるという仕組みになっている。それは中学に入学した時から決まっており、「この学年はピンク色の学年」と指示されることになるのである。この色わけはジャージのほかにも、水泳キャップなどにも見られた。また、この学校では何でも「中学生はえんじ色、高校は紺色」と、わかるようなところがあり、写真 14-4 と写真 18-1 もそれが見られるもののひとつだ。どちらも着装物に上靴が確認されるが、両者の上靴の色が「えんじ色」、「紺色」と異なることがわかる。もちろん、ここでも赤の上靴が中学を、青の上靴が高校をあらわすものとなっている。このことと、先ほどのジャージの刺繍などの色わけをあわせて考えると、中高の学年まではっきりわかることができるようになる。たとえば、ジャージにピンク色の刺繍がされていて、えんじ色の上靴をはいている生徒ならば、ジャージの刺繍から中学2年生、または高校2年生ということが絞られ、上靴から中学生ということがわかるので、それが今年の中学2年生であるということがわかるというような具合である。

また、体育祭では伝統的ともいえる生徒の衣装既定によって、その人が中高の何年生であるのかがわかるようになっている。マスゲームの衣装が中学1年生から高校3年生まで

決められた着装をうながされるので、それを見ればその人が何年生であるのかがわかるという仕組みになっているのである。写真 15-1、写真 17-4、写真 18-1 がその例だ。

写真 15-1 は着装物を見ると、体操服の上に着たベストとそれにあわせられて作られたようなスカートを確認できる。このベストとスカートは年々受けつがれてきたもので、毎年中学 3 年生が着ることになっている。中学最後の年のしめくくりのようなかたちで、学校伝統の愛唱歌にあわせてこれを着て踊るのである。そうすることで、この着装を見れば、今の私と同じように卒業生や学校関係者には「これは中学 3 年生だ」とわかるようになっているのである。写真 18-1 の着装物にはレオタードが確認されるが、これは高校 3 年生の衣装とされている。これも写真 15-1 と同じようなかたちで学年の判断がなされることになる。写真 17-4 は着装物にゆかたと肩にしばられた紐が確認されるが、これは高校 2 年生のゆかただと考えられる。高校 2 年生の場合、毎年全く一緒の衣装というわけではなく、とにかく衣装として学校指定のゆかたを使うことが決まりになっている。体育大会の昼食休憩を挟んで全校生徒がこの学校指定ゆかたに着がえて、音頭が始まるのだが、この時高校 2 年生だけは先ほど紹介したような着装をして、この踊りには参加しない。つまり、そうにして、昼食休憩の時には、全校生徒はゆかたに着替えていることになる。そして、その時、何らかの加工がされたゆかたの着装をしているものが高校 2 年生、それ以外の学年が純粋なゆかたの着装をしているということがわかるようになっているのである。

ただ、このようなことはこの学校の内実を知らない者でなければ気づかない開示だといえよう。そんな内輪的な開示として、写真 18-6 からわかることがある。写真 18-6 の着装物からはジャージ上下とマフラーが確認されるが、このジャージとマフラーのとりあわせは学校内で掃除、それも冬の大掃除の時のみにみられる着装なのである。基本的に教室内というのはエアコンで室温調整されていることもあって、そのような着装をしていたら教師から注意をうけることとなる。教室から教室に移動するときでさえ、そのような着装は許可されないが、掃除となれば別である。掃除をする際に窓を開けるので、冬であれば教室の温度が急激に低下するため、マフラーの使用が許可されるのである。また、大掃除の時のみジャージを着ることになっているので、写真 18-1 の着装が大掃除の時のものであることがわかる。このように、学校から決められた着装をすることで、その学校の生徒であるという証明をするだけでなく、自身にまつわる色々なことを開示するということがわかった。しかし、これらの開示はその学校の内情を知る者でないとわからないものが多く、開示できる範囲はその開示を受ける人の持つ知識によって異なるということもわかった。

(4) 着装の一様性

ここでは表1にある一様性というところに 印がつけてあるものについて述べることにする。この 印がつけられているものは、その写真に写っている自分と周りの人との着装に何らかの一様性がみられたものである。

着装の一様性が見られた写真の総数は44枚で、6歳～18歳がほとんどであった。一様性が見られた理由として、幼稚園での着装指示、小学校での着装指示、中学校での着装指示、高校での着装指示、という学校側からの着装規定に並び、習い事教室からの着装指示、また、それらのどれにもあてはまらないオリジナルなものをその他として考えた。

その結果をあらわしたものが図1である。

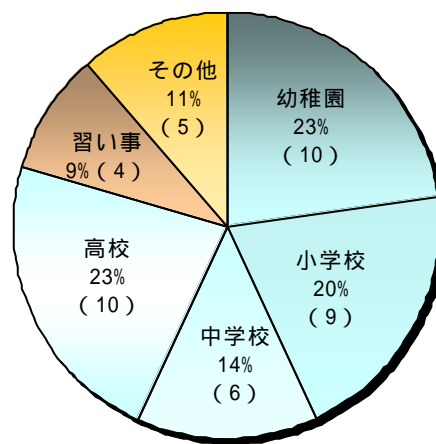


図1 着装の一様性の理由

まず、幼稚園での着装指示によるものが10枚で全体の23%、小学校での着装指示によるものが9枚で全体の20%、中学校での着装指示によるものが6枚で全体の14%、高校での着装指示によるものが10枚で全体の23%であることがわかるが、それぞれをあわせて「学校での着装指示によるもの」というひとくくりで見れば、この合計が35枚で、大きく全体の80%をしめることがわかる。この「学校での着装指示によるもの」というのは、日常的に着用を義務づけられる制服のほか、何か行事があるごとに「こういう着装をすること」とあらかじめ決められて着装することなども含んでいる。たとえば、写真14-2や写真15-2の着装物として確認されるTシャツも、旅行先での着装として学校側から指示されたもののひとつである。

林文俊(1986)によれば、人々が集まってなす集団行動には、集団成員間で共有されている標準的な考え方や行動様式などの集団規範の中に、被服に関するものである「被服規範」とよばれるものがある。この被服規範としてもっとも明確とされるのが学校、または会社などの集団における制服である。Solomon, M. (1987)によれば、制服には、役割の混乱を減らし、集団に対する忠誠心を忘れにくくしたり、同一集団の成員どうしを互いに同定しやすくしたり、被服に関する成員間の競争をなくしたりする機能があり、この機能により私たちは抑制されるぶん、ある種の安定感を得ていると考えられる。

私が幼稚園を変わって間もないころ、上半身をあらわにするのが幼いなりに恥ずかし

かったのだが、そのうち、まわりの皆が普通な様子でこのような格好をしていることに気づき、皆がやっている格好を自分だけが嫌がってやらないことの方が恥ずかしいのではないだろうか、と思うようになっていた。その後は写真 6-4 を見ればわかるように、平気でこのような格好をするようになったのだが、ここでも「皆と一緒に」という安定感が得られたのではないかとということが考えられる。このような考えのもとで、私は学校の制服など定められた着装を窮屈なものと感じていたと同時に、どこかで感じていた集団への所属欲求を満たしていたのではないかと思われる。

つぎに、まとまった枚数で確認されたものとして、習い事教室からの指示によるものがあげられるが、これは全部で 4 枚あり、全体の 9%をしめていることがわかる。ここでの習い事というのはバレエのことであり、ここではいわゆるバレエ衣装が教室側から指示された着装物ということになる。バレエ衣装というのは劇中で与えられた役に、より近づくための演出の道具として使用されるが、全体の統一感を出すためにも有効なものであり、そういう点では制服と同じような効果があるといえよう。

では、「その他」とされた、残り 5 枚の写真の理由とは、どのような理由であったのかをひとつずつ見ていきたいと思う。

写真 2-3 では兄との着装から一様性が見られるが、着装をしている本人たちの意志はほとんどなく、ここで着装の一様性が見られた理由となっているのは親がこのような着装を指示したため、ということが考えられる。このような着装は、幼少時によく見られるものであると思うが、親が自分の子供たちに揃いのものを着させたい、と思うのも、学校が生徒に制服を着させたいと思うことと似たところがあるように思われる。

写真 16-1 では同級生との髪飾りに一様性が見られるが、これは写真をとるときに、この同級生からこの髪飾りをつけるように言われたためにつけたものであり、この髪飾りを一緒につけることで仲むつまじく見えるという演出の意図が含まれていたように思われる。ちょうど、この写真をとった時期にこのような髪飾りが若年層に流行っていたのだが、このことも多少影響しているのではないかと考えられる。

写真 17-5 ではクラブ員全員が着ている制服からも着装の一様性が確認されるが、さらにクラブ員数名からハッピーの着装が見られ、ここではこのハッピーのほうに注目することにする。この写真は文化祭のときのものであり、文化祭の展示会場がその展示テーマに合わせた会場作りをしていたので、その雰囲気に合わせて制服の上からこのハッピーをはおることになったのである。いつもの制服にハッピー 1 枚をはおる、というような簡単な着装ではあ

るが、何人かが同じ着装をすることによってその場の雰囲気をも高める効果が得られたのではないかと考えられる。これは先ほどあげたバレエ衣装を着装するときの効果と同じようなものではないかと思われる。

写真 20-2 では和装をしている点で同級生との着装から一様性が見られるが、これは同級生と一緒に、デパートの一角で行われていた和装をテーマとした展覧会を訪れたときのものである。自分たちもこれに便乗して、展覧会のテーマに即した和装のおしゃれを楽しむことが非常に粋であるように考えられたため、この着装をすることになったのであるが、それに加えて、自分たちと同じような考えを持った人が和装でこの展覧会を多く訪れると、そのイベントがさらに面白いものになるのではないかという期待もあった。

また、普段自分ひとりでは中々このような和装をすることができないのだが、誰かと一緒にあればできないこともない、という気持ちが生まれとことがこの着装を可能にしたということも考えられる。

写真 22-6 ではここにうつるサークル員のほとんどが同じTシャツを着ていることがわかるが、このサークルでは文化祭で引退するサークル員用に自らがデザインしたTシャツを作って、それを全員が着ることを毎年の伝統行事となっていた。伝統を引き継ぐため、というのもここでの理由として考えられるが、やはり、大きくはサークル員の統率や協調性を高めることなどが目的となったものではないかと思われる。

これらとは逆に、自分の周りでは着装の一様性が見られるのに、自分からはその同調が見られないことで自分がその集団に属していないということがわかることもある。写真 5-1 では、私の後ろに見える人たちは一定の制服を着ているのに、私はというと、そのような制服ではなく普通の私服を着ていることがわかる。ここから私とその制服を着ている集団には属していないのだということが開示されることになる。写真 21-3 では、私の前にうつっている人たちが客室常務員や看護師の格好をしていることがわかるが、他の写真を見てもわかるように、このような着装をする機会があれば私は率先してそれに加わるだろうということがいえる。ところが、このときの私の着装を見ると普通の私服であり、このことから私はこの集団の一員ではない、ということがわかる。

一般的に、集団への所属意識が高いほど着装の同調が見られるとされているが、ほとんどが何気なく、当たり前のもので行っているものが多いと思われる。私がこれだけ周りの人との着装と一様性を持っていながら、その多くを半無意識的に自分が多種の集団の中に所属しているということをあきらかにしていることがわかる。また、このような着装

の一樣性はその着装を共有した人たちの中に仲間意識を生み、私自身そういう環境に居心地の良さを感じていたのではないかと思われる。このことで私自身の所属集団の開示ができるとともに自分自身の集団意識への開示ができたということがいえるだろう。

2.3 着装による自分の呈示

何らかの呈示を含んだ着装行為には自己概念が関係してくると考えられる。自己概念というのは自分が自分自身についてのさまざまなことについて認識し、それをどう受け止め、どう評価するか、というところに生じるものである。けして、事実のみが自己概念に反映するわけではなく、その人自身がどう自分をとらえるかが自己概念を形成するうえでもっとも重要なものとなる。この節での目的は自分の着装行為においての自分の呈示を知ることであり、この自己概念を知り、自分が自分のことをどうとらえているのか、ということをあきらかにすることである。それでは各項においてそれを具体的に見ていくことにする。

(1) 幼少児期における着装

Stone,G.P. (1962)によれば、人の着装行為や外見に関連して自己概念の形成がいくつかの段階を経て、存在するとされている。最初の時期、つまり幼少時期にはおもに親の選んだ服を着させられ、この時期には着装の意味などは明確に理解できないものの、身体とそれを取りまいているものの区別を意識するようになるといわれている。そして、何となく「かわいい」「女の子らしい」といった自分の外見に対しての周囲の反応を自己の中に取り入れ始めるのだという。私自身にもそのようなものが見られないかを調べてみたところ、次のようなことがわかった。

写真 4-3、5-2、5-3、5-4、5-5、5-6、5-8、6-1、6-2、7-2、10-4 からはレースをあしらった着装物が、写真 7-4、7-5、10-4 からはリボンが付着する着装物、またはリボンそのものが確認された。レースもリボンも一般的に「かわいい」「女の子らしい」という印象を与えるものであるが、このことから、以上にあげた写真の時期に親が、または私自身がそれに感化されて「かわいい」「女の子らしい」という印象をもたれるような着装をしたということがわかる。このような着装は、ピアノの発表会のための晴れ着として、レースやリボンを含む着装をしたと思われる写真 10-4 をのぞいては、4 歳から 7 歳の時期に限定され、それ以降は一切見られない。このことから、ある時期を境にこのような着装によって、「かわいい」「女の子らしい」という印象をとくにもたれなくても良い、と私が思うよう

になったのではないかと考えられる。

レース、リボンなどというような装飾品と同様に、赤色、または、赤系統色であるピンク色を使用したものも、一般的に「かわいい」「女の子らしい」というような印象をもたれやすい。時代の変化とともにこのような色彩観念は変わってきているものの、「女の子＝赤」という考えには未だに根強いものがあるように思われる。私がこの論文を書くにあたって、写真を収集しているときから気になっていたのが、この赤色やピンク色の着装物が幼少時期にとっても多く見られたことである。

図2は表1から確認されるすべての着装物から赤色やピンク色のものがどれだけ確認されたかを年齢別に出し、それがそれぞれの年齢の中でどれだけの割合をしめていたかをあらわしたものである。この割合をここでは赤の着装率と呼ぶことにする。たとえば、表1から0歳の写真の総数は5枚であることがわかるが、赤やピンクの着装物がみられる写真がこのうち4枚あるのでこのときの赤の着装率が80%ということになる。このような方法で得られた全体の結果について詳しく説明するとともに、それによってどのようなことがわかったかを以下に述べていきたいと思う。

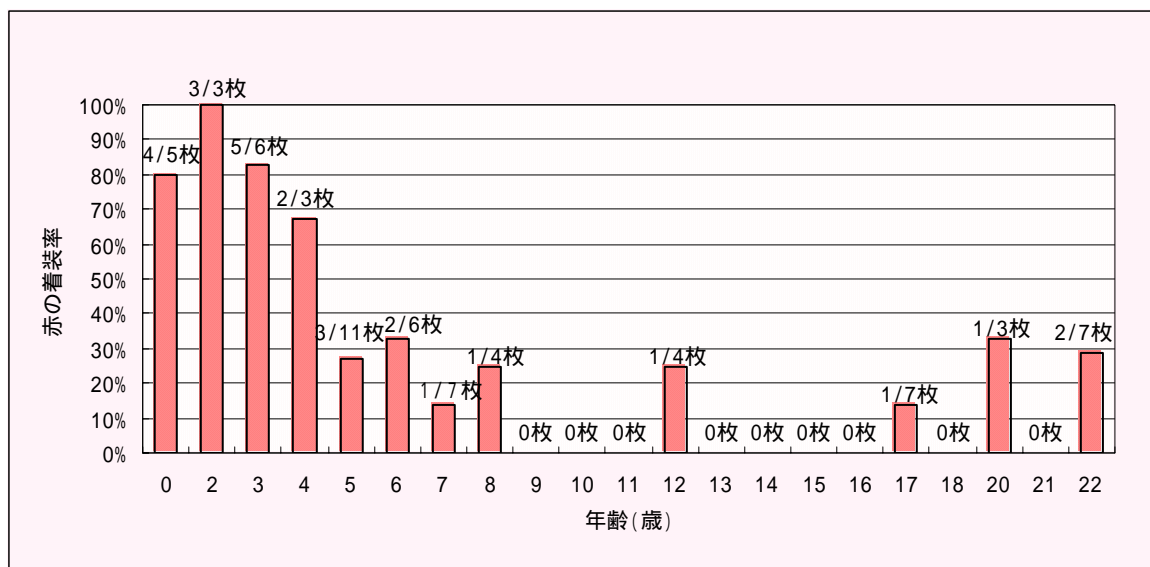


図2 赤の着装率と年齢との関連性

図2をみると赤色やピンク色の着装物がみられたのは0歳から8歳までに集中しており、あとは12歳、17歳、20歳、22歳にそれぞれ確認されているのがわかる。とくに0歳から4歳の赤の着装率は高く、0歳は5枚中4枚、2歳は3枚中3枚、3歳は6枚中5枚、4

歳は3枚中2枚というように、ほとんどの写真から赤色、またはピンク色の着装物が確認されたことがわかる。つまり、0歳から4歳の時期に、私が「かわいい」「女の子らしい」と思われようとする呈示を含む着装行為がみられたといえるだろう。これに比べ、5歳や6歳の赤の着装率が低いことがわかるが、これは幼稚園に通い始めたことが影響していると思われる。つまり、幼稚園の制服を着なければいけないので、着装の色を自由に選択できないという状況におかれているからである。実際、5歳の写真で制服を着ているものは表1から確認すると11枚中7枚あり、これが赤の着装率を下げた原因となっていることがわかる。逆をいえば、制服を着ていない写真は4枚ということになるが、このうち3枚から赤色やピンク色の着装物が見られるため、5歳の赤の着装率は決して低いわけではなく、むしろ高いということがいえるだろう。同じように6歳では、制服を着ていない写真3枚のうち、2枚から赤色やピンク色の着装物が見られるため、ここからも赤の着装率が高いということがいえる。これに、上記したレースやリボンの装飾がなされた着装物の確認結果をあわせると、0歳から6歳の時期に「かわいい」「女の子らしい」という印象を与える着装し、そのことからそういう印象をもたれたいという呈示があったのだということがいえる。また、0歳から6歳までほどの積極性は見られないが、7歳にもそういう着装による呈示が若干あったということがわかる。ただし、この呈示のほとんどは Stone (1962) の考えをもってすると親に所以するものであるといえよう。そして、当時の私自身にも何となくその呈示する意図、つまりここでは「かわいい」「女の子らしい」とみられようとするのが理解できており、その着装を自らも好んでしていたのではないかと考えられる。よって、このような時期からすでに着装による呈示が始まっていたということがいえることになる。

(2) 身体の露出

着装によって自分を呈示するといってもその内容はさまざまであり、先ほどのように自分を飾ることでなされる呈示もあれば、自分の欠点を隠すことでなされる呈示もある。後者のような呈示を含んだ着装で、最もポピュラーなものが身体的欠点をカバーしようとしてなされる着装である。ちょうど顔にファンデーションを塗る行為と同じように、自分を手直しする感覚に近い。たとえば、低い背を高くみせようとブーツを履いたり、太った身体を細くみられようと黒い服を着たりすることがそれにあたるといえよう。中野広(1986)によれば、服装の種類と気になる体型との関係について調べたところ、年齢層によって気

になる体型は異なるということがわかり、各人の着装においては、気になる身体部分をカバーするようなものが選ばれることが多いということがわかったという。また Lerner,R.M (1973) によれば、男性と女性では自己に対する身体評価の部位が異なり、男性においては自己の身体特性に対する意識が女性と比べて低く、それでも比較的评价が高かったのは髪型、顔、身長、姿勢などであり、これに対して女性は肥瘦度や体のラインなど全身の見えに関わるものの評価が高かったという。女性である私自身も身体に関しての意識は強く、できるだけ体型がよく見えるような着装を心がけており、同じ理由で、真夏の気温が高い日であっても腕や足などの露出はひかえている。しかし、そんな私も以前からそのような着装ばかりをしていたわけではない。では、私はいつから露出をひかえた着装をするようになったのか。そこで、私が露出度の高い着装をしていることが確認できる写真がどれだけあるか、またそれが年齢間でどれだけの割合をしめるかを調べた。そこで出た割合をその年齢の露出率とし、年齢と露出率の関連性、また、その推移をあらわしたものが図3である。

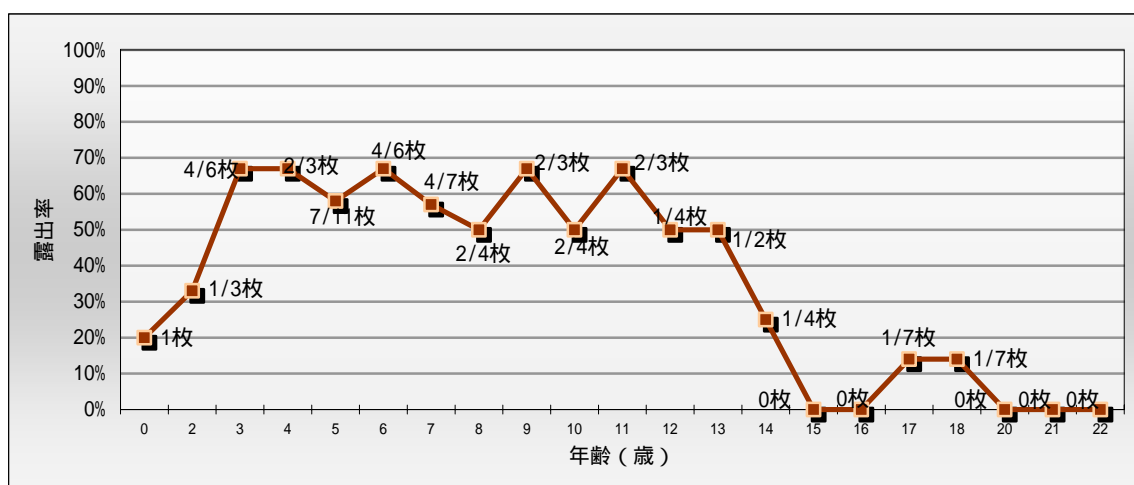


図3 年齢と露出率の関連性

3歳から13歳にかけての露出率が、多少の高低の動きは見えるものの高い値をしめており、15歳を境に低い値をとるようになっている。このことから、3歳から13歳の時期には私の身体に関する意識が低かった、または、自分の身体に満足していた、ということがいえる。そして、15歳以降は身体に関する意識が高まり、その結果、露出をひかえた着装をするようになったということがいえるだろう。

気になるのは2歳以前の露出率の低さであるが、「2歳以前には身体意識が高く、露出も控えられていた」というようには考えられにくく、たまたまそのような着装が見られなかっただけなのではないかと推測される。それよりも、気になるのは15歳以降に見られた露出度の高い着装というものがどのようなものだったかということだ。15歳以降に見られた露出度の高い着装として、写真17-3と写真18-1があげられるが、まず、写真17-3の着装で露出度を高めている着装物となったブルマに注目する。このブルマは学校の指定の体装服のひとつであり、またこれは撮影時にあった体育祭の種目に出るための着装であたため、仕方なくやった着装であるといえよう。写真18-1の着装物からはレオタードが確認されるが、これも体育祭での出し物のために指定された着装物であり、自らが好んで選択した着装ではなかったといえる。もしも、学校の指定がなければ、私がこのような着装をすることはなかったのではないかとと思われる。

その一方で、自ら好んで露出度の高い着装をしていたのではないかとと思われるものも確認できる。たとえば、写真14-1の着装物には、腕も足も大胆に出したノースリーブのワンピースが確認される。この写真は学校の同級生と休日に遊びに行ったものであり、自分の好みの私服を選んで着装していることがわかる。つまり、この時点では、自分の身体を露出することに抵抗がなかったということになり、このことから考えても、15歳を境に身体に関する意識が高まり、自分の身体の露出をひかえる、もっといえば避けるようになったということがわかるだろう。

このようにそれぞれの着装から身体露出度をみることで、自分が自身の身体についてどのように感じているかということがわかった。この部分では自身の精神面を開示したということになるだろう。また、私の場合15歳から自分の身体に不満を持ち出したために、「こんな身体であることが他人にわからないように」という呈示を含んだ、露出をさけた着装をしていることがわかった。写真22-2などはそのことをあらわす典型的な例であるが、そのことについてはつぎの「(3) 着装に込められた思い」の中でふれることにする。

(3) 着装に込められた思い

少なくとも私においては、常に着装をする際には必ず何らかの呈示をもっている。ほとんどが無意識的であるが、時として非常に強い意識をもって呈示の意図を含む着装を行うこともある。この項では、着装によってなされた自分の呈示がわかる写真を1枚ずつ見てゆき、自分がどのように見られたいと思ってそのような着装をしたのかをあきらかにして

いくことにする。

まず、写真 16-2 の着装であるが、これは着装物だけを見ると、制服をはじめ、学校に指定された着装をしていることから、所属する集団に順応しているような印象を受けるが、よく見ると校則では、靴下を三つおりにして履かなければいけないところ、それを伸ばしたままで履いていることがわかる。これは靴下を三つおりにした状態よりも、伸ばしたままで履いたほうが足の形がきれいに見える、というような見栄えを意識することとともに、「こうして履いたほうがカッコいい」という暗黙の考えが生徒の中にあったことがこの私の着装に影響を与えたと思われる。このことから、自分が「カッコいい」とされる着装を取り入れているということを暗に周りに呈示していることがこの写真からわかる。

写真 17-6 は今までの写真からは見られなかった色彩の着装コーディネートが確認されるものであり、この写真の着装のように「橙色と青色」というような対抗色を好んであわせることがこの時期の着装に多く見られた。この頃、古い映画などで見られる昔のファッションに興味をもちはじめたことがきっかけで、自分の着装における色彩観にも影響をおよぼしたものと思われる。その映画の登場人物のような着装をすることで、自分もそれに順ずる雰囲気をもった人物に見られたいということがこの着装をする理由となっている。また、この頃くらいから自分なりにその都度何らかのテーマをもって着装することが多くなっていったことが自分の記憶の中であきらかになった。

写真 17-7 は小学 1 年生の時に通った小学校へ訪れたときのものであるが、同じ 17 歳のときの私服による着装が確認できる写真 17-2 や写真 17-6 と比べてかなり地味な着装であることがわかる。このような着装をしたのは、訪れたその小学校付近が田畑の広がるようなのどかな地域であったため、あまり派手な着装をしていると目立ってしまうことが予想されたからである。つまり、自分がその地域から浮き立つことを恐れ、地元の間とも見られるような着装を意識したところがここでの呈示となっている。

写真 18-3 は写真 17-5 と同じように文化祭での展示テーマに合う着装をしたものである。ここで注目したいのはこのような展示テーマを意識した演出を含む着装とともに、ちゃんと学校指定の体操服を着ていることである。これは文化祭のときなどであっても、勝手に自分たちが取り揃えたものなどを着装して構内を歩き回ってはならない、という学校の雰囲気があったからである。そのような具体的な注意を実際には受けたことはないものの、何となく生徒の中でそう思われている部分があり、その結果「ちゃんと学校指定のものを着ていますよ」というアピールの意も込めて、このような着装をすることになったのであ

る。よって、この着装には展示のテーマに即した雰囲気演出すると同時に学校にも則した着装を行っているという学校側にアピールするという混在した呈示がみられることがわかる。

写真 20-1 は昭和初期の生活をテーマにした展覧会に訪れたときのものであり、ここではその世界に染まりたいという思いで、自分なりに昭和初期をイメージした着装をした。また、写真 20-3 は漫画兼アニメ作家の展示物を観に行ったときのものであるが、これもアニメ的な色彩をイメージして着装のコーディネートをした。写真 20-2 の和装もそうであったが、これらはすべて展示されている何かに合わせて自分の着装を行ったものである。これは、展示されているテーマに自分の着装を合わせること、その展示テーマや作者に対して自分なりの敬意を表すとともに、そのテーマにそって最大限に楽しめているという満足感や達成感が得られたりすることが理由になっている。写真 21-1 は古い街を歩いたあとの様子であるが、この街というのが昔から残る外観を壊さないよう管理されている場所であったため、自分たちがそこを歩くことでその雰囲気を損ねることにならないようにという最低限のことを考えてした着装である。そのため、とくに凝った着装でもないが、自分と街が少しでも調和するようにと色味などをおさえたものを選んで着ていることがわかる。写真 22-2 での着装物として確認されるカーディガンは、実際は肌の露出を抑えたいがために羽織ったものであるが、これを羽織ることで重ね着のおしゃれをわざとしているかのように見られたいと考えられたものである。

写真 21-2、写真 22-4、写真 22-5、写真 22-7 はいわゆるステージ衣装として着装を行っており、すべてライブでの選曲に合わせて着装が考えられている。ほとんどが、華やかに見えるようにという呈示のあるものであるが、写真 22-4 と同じ日にとられた写真 22-5 では写真 22-4 と比べて少し地味に見えるようにという呈示を含んだ着装をしている。よく見るとほとんど同じものを着ているが、写真 22-4 で見られるアクセサリ類と、レース状の華やかな上着がないことがわかる。写真 22-5 でとられたステージでは、自分の演奏パートがメインパートではないため、着装面においてもあまり目立つものではおかしいということが考えられたことでこのような着装をすることとなった。前に出るべきところでは出て、控えるべきところは控える。そのようなことを着装面でも表現したかったのである。

これらを見ると自分が何かに合わせるように着装していたり、何かになりきるために着装していることが多いということがわかる。しかも、それを自分が楽しんでやっているということもうかがえ、自分の着装に対する強い思いのようなものが見られた。

3 レポートから見られる自分

3.1 方法

自分自身と同じゼミに所属する学生 3 名が、かつて同じテーマについて作成したレポートを材料とし、このレポートをそれぞれ比較することで、互いの相違点を探った。このとき、文章の内容よりも文章の書き方、言葉使いなどに注目して比較すると相違点が発見しやすかった。その後、他の 3 名とは異なる自分のレポートの特徴について No. をふりあて、なぜそのような特徴を生むことになったのかを自分自身に問うことを繰り返し行った。

3.2 結果と考察

以上に述べられた 3.1 での方法により、自分のレポートの特徴が次の表 2 ように発見された。また、これらの特徴について詳しく述べるとともに、なぜこのようなレポートの作成をすることになったのかをあげていくことにする。

表 2 自分のレポートの特徴

特徴No.	皆と比較して目立った特長	詳しい説明
1	題名がない	レポートに題名を付けずにすぐ文章に入る
2	テーマに即した実質的な説明が少ない	授業での状況説明や、テーマ全体に対する概念的説明がない
3	独自の前置き・後書きのようなものがある	ツカミ、オチのようなものでテーマそのものに直接関係のない文章がある
4	参考文献による引用がない	参考文献の内容に関する記述はあるものの引用文がない
5	自分の経験などを用いてテーマにそった例を出す	テーマ内容をそのまま述べずに、それによる例を出すことでなんとかテーマ枠を広げようとする
6	自分流の解釈を記述する	テーマを噛み砕いて自分の解釈をしたのちの記述をする
7	平たい言葉・表現を多用する	～なァ、などレポートを書くうえでふさわしくないとと思われる言葉を使う
8	文章全体を画面で捉える	文章が切れて出来る空白部のバランスを画面的に捉え、その見ためが悪い場合は再度文章を作りなおす
9	文章のリズムを重んじる	できた文章を読んだときに、リズムの良い文章になるよう心がける

特徴 1 については、まず、自分が書いているものには題名をつけるにあたらないという思いがあることがあげられ、要は自分の書くレポートが不完全である、という思いが心に

ひそんでいることが原因であると考えられる。また、題名というのは、文章全体において、非常に重要な役割を果たすため、題名と内容の不一致や、題名をつけることによって文章全体がふりまわされる状態になるのではないかとこのことを恐れていることが原因となっていると思われる。つまり、題名をつけるというプレッシャーから何とか逃れたいという後ろ向きな気持ちが導いたものであるといえよう。しかし、その一方で不完全な題名をつけてレポート全体の質を下げるのであれば、題名自体をつけないほうがよほどレポートの完成度が維持されるのではないかという思いもあった。ここから、自分の自信のなさや困難なものに対する逃げの姿勢が見られるとともに、ある種の完璧主義的な一面も見られるように思われる。

特徴 2、4 は、このレポートの読み手が限られていることに関係すると思われる。特徴 2 や特徴 4 からは面倒であるからこのような書き方をしたかのように思われるが、決してそういうことではない。このレポートの読み手として考えられたのは、ゼミ担当教授や自分と同じゼミに参加する学生のみであり、この読み手にあたる人すべてが私と同等、またそれ以上にそのテーマや授業内容などを把握しているということになる。その読み手に対して重複する説明をすると失礼にあたるのではないかと、また、読み手を退屈させてしまうのではないかと、さらには不快感を持たれるのではないかと、という気持ちをどこかで感じていたことがこのような書き方を導いたのではないかと考えられる。また、このようなレポートで読み手が望んでいるのは、個人独自の考えを述べるものではないかと、勝手な解釈をしていたことも原因となっているのではないかと考えられる。

特徴 3、7 は文章を読みやすく、理解しやすいものを作成したいという気持ちからあらわれたものであると思われる。また、その思いから自然と面白い文面にしたほうが良いのではないかとこの考えのもとでレポートが作成されることとなったのではないだろうか。その反面、どのように文章を書き出せば良いのか、どのように文章をしめればいいのか、どのように文章を書き進めれば良いのか、という不安があり、自分にそれほどの文章能力がないと判断しているため、このような書き方を選択しているということもいえる。文章能力が足りないことで、レポートに書かれた内容が何も伝わらないのなら、多少おかしな書き方でもその内容が伝わるほうが良いと思ったゆえのものなのである。しかし、このような書き方をする事で読み手にどう思われるのだろうかという不安感を常に抱いていたということも確かである。それでもこのような書き方をし続けたのは自分の文章能力における自身のなさ、もうひとつは自分自身が楽しみながらレポートを作成したいという気

持ちが強かったからではないかと思われる。私は、どんな文章を作成するにしてもそれらをすべて自らの作品として愛着をもっていたいと思っている部分があり、自分を含めた読み手に楽しく読んでもらえるかどうかという期待感が文章全体を書き進める力となっている。そのことがこのような書き方をする理由となっているのだが、ここでもやはり読み手が限られているということで、ある程度どのような書き方をしても許されるのではないかという甘えた考えがあることもこれに加えていえるだろう。

特徴 5、6 は、授業や文献により学んだことをより深く考え、そのことによってそれが自分にとって興味深いものであると感じたいがためにあらわれたものではないかと思われる。つまり、これは読み手よりも自分自身を意識して書かれたことをあらわしている。書きながら学んだ内容を消化することが進行されており、新しい知識をそのまま吸収するだけでなく、できる限り面白いと感じたいという意識がこのような書き方を生んでいるのではないかと思われる。これに加え、上記した特徴 2、4、また特徴 3、7 があらわれた理由がこの特徴 5、6 にも同じようにいえる。

特徴 8、9 も作品的感覚からくるものであり、文章で作り上げるレポートを視覚的、聴覚的にも良いものにしたいという思いがこれらに反映している。また、ここでも自分の能力不足によって文章構成やその内容などに欠落している部分を作ってしまうのであれば、せめてこのような細かい部分に気を遣うことでカバーしたいと思うことがこのような特徴を生むこととなっている。このような特徴は私が携帯電話などのメールを送信する際にも見られることである。私は文章の一番前に句点が出てくることを不快に思うのだが、どんなに駆使しても送信先が携帯電話であれば、それぞれに機種が異なるため文字配列も異なり、結果、句点が前に出てくること回避できないときがある。そのようなことを考えた末にとうとう句点を使わず、文章をスペースのみで区切るという方法をとるようになった。これらは自分が不快に思うものは読み手にも不快感を与えるものになるのではないかという考えがもとになっているのであるが、実際は自己満足にとどまっているのではないかと疑問に思われるところでもある。

以上それぞれの理由から、いくつもの「自分」が見られ、とくに「不安感を抱いている自分」、「楽しもうとする自分」、「読み手を意識する自分」だと思われるものが多く、非常に印象的であった。文章全体に対する不安や、読み手に不快感を与えるのではないかという不安など、自分自身の能力的な面とともに他人からの自分に対する意識に関する不安感を抱いているものの、その不安感にまるで気づいていないかのようにレポートを書く

こと自体を楽しもうとする自分が同時に存在している。これは対極的ともいえる自分であるが、「不安だからこそ楽しむことで何とか乗り越えよう」という昔から備わった自身の考えによるもので、むしろこれらが相互的に存在することのほうが私にとっては日常なことだともいえる。もちろん「楽しもうとする自分」は単独でも見られ、文章のリズムや見た目の構成などについては読みやすさや見やすさを目的としたものであるが、実際のところ半分くらいは自己満足の世界におけるものである。ただし、不安感を持つこともそうであるが、ここでも読み手を意識している部分があるといえ、これはこのレポート全体から見えるものであるともいえよう。このように、自分が作成したレポートの特徴の発見から「自分」を見ることができ、このレポートの特徴がまさに自分自身の特徴なのではないかと思われる部分が多々あった。レポートというのは自分の内面の言葉を文章で構成したものであるため、自分の主張を述べたレポート内容自体から「自分」が見られるものと思っていたが、実際はそれ以外の細部において「自分」が確認され、これもここでの大きな発見となった。

4 自分自身と向き合って

4.1 「着装」と「レポート」2つの材料から

今回、2つの方法を用いて「自分」を探ることを行ったが、異なった分野の材料であるのにも関わらず、どちらからも同じように「自分」が発見されることとなった。扱ったレポートでは、着装から見られた所属集団など自分がおかれている状況の把握まではできなかったが、自分の内面的な部分などはどちらからも発見でき、同じような「自分」があらわれていることがわかることもあった。たとえば、何事に対しても楽しむところもそうであるし、表面的なものにこだわるところもそうである。また、そういったものの裏にある理由が欠点を隠すためであったり、補うためであったりすることも着装、レポートの両方から見られたことである。しかも、その欠点を隠しているということを知られたくない、と思っていることも両方からわかり、自分が非常に複雑な思いをもった人間であることをあらわしていることを知ることとなった。

着装、レポートからわかった「自分」というのは、日常的に見られる「自分」そのものであった。厳密にいうと、日常的に自分自身が認識している「自分」と薄々気づいていた「自分」の存在を確認することができた、というところだろうか。後者の「自分」という

のは見たくないと思っていたネガティブな「自分」でもあり、それをカバーするために私は道化という手段を使うことが多い。道化師となった私はそれを見た他者にそういった道化の印象だけを残し、自分のネガティブな部分を隠せたことにひとり満足するのである。いや、実際のところ自分にも道化することで自分自身を安心させているようなところもあるのではないか、もしくは、日常的に私はこの道化師を自分そのものだと信じ込んでしまっているのかもしれないとさえ思える。この部分は今回の自分とのコミュニケーションの中でもはっきりと確認できないものであった。

日常的に見られる「自分」と、着装とレポートから見られた「自分」が繋がったのは、これらの材料が自分にに関わり、また、自分自身の選択に左右されて成り立つものだからである。つまり、自分自身の身の周りにあるものであれば、すべてに同じことがいえ、同じように「自分」を探ることが可能となるのである。もちろん、この論文も例外ではない。

4.2 自分らしさと繰り返す呈示行為

初めて接する人に対する第一印象というものが非常に大きな情報となることを私たちは自らの経験を通じて知っている。それは自分が他者を見るときもそうであるし、また、他者が自分を見るときにも同じことがいえる。だから、私たちは初対面の人に良い印象、つまりは自分を良いように装った情報を与えようと自分を呈示するのである。私自身も今となってみれば、大学1回生の最初のほうは初めが大事であるといわんばかりに必死におしゃれをしていたような気がする。良いか悪いかは別として、それが今も他者がもつ私の外見に対する印象となったのは間違いない。大学4回生になった今でさえ、少しラフな着装をしていると「今日は何か雰囲気が違うね」という言葉を不意にかけられることがある。しかし、これが場所を変わってアルバイト先になればまた別な状況が生まれる。アルバイト先ではスーツもしくはそれに順ずる着装をすることが決まりになっており、いつもはそのような着装でいるのだが、たまたま飲み会に誘われたときに学校によくしていくような着装で行ったことがあった。待ち合わせの場所へ着いてもすぐに私であることに気づいてもらえず、ようやく気づいてもらえたときには「いつもと感じが違うからわからなかった」と、こう言われた。こうなってくるとどれが自分であるのかわからない。もしくは、これらすべてを自分であるというべきなのであろうか。

自分の存在する様々な環境と同じ数だけ様々な自分が存在する。私たちは知らず知らずのうちに、いつでもその環境に順応するよう自分の立ち位置や役割を静かに認識し、自分

がどうあるべきかを瞬時に察知するのである。ときにはその役割を自分で選択できる場合もあり、そういうときにはあるべき自分をあらかじめ呈示することで自分自身と周りの印象を管理するのである。第一印象を重んじて色々と自分を装うのはそういうことである。時の経過とともに他者との接触頻度が多くなれば多少の変化もあるが、第一印象によってある程度の自分の印象が形成されるのではないと思われる。これは外見だけにいえることではなく、性格などの精神面であってもそうだ。表面上にあらわれるものだけが他者に「自分」であると認識され、それが継続すると「自分らしさ」とであると捉えられる。内に秘めたものは何らかの手段によって外部へ情報を流さない限りはいつまでも内にあるばかりで、他者からみれば「自分」としてはもちろん「自分らしさ」とあるということを認識されることはない。これは自分にとって好都合になるときもあるが、自分を苦しめてしまうときもある。呈示し続けるというのは、ついた嘘を最後まで誰にも言わずに隠し通さなくてはならないようなもので、ときに息苦しいこともある。ただし、自分自身もその呈示行為に気づいてない場合は別である。この場合は自分も他者と同様、自分自身にだまし続けられれば良いからである。それ以外では自分の作った「自分らしさ」を維持するために呈示行為を繰り返すこととなり、演じることに疲れを感じることもあるといえるだろう。

しかし、演じ続けるかどうかは自分自身が決めれば良いことであり、実はこの役には別の一面があったのだ、というように途中でシナリオを変えることも可能であるし、そのまま徹底した役を演じきることも可能であり、舞台袖にはけて二度と同じ舞台に上がらないことを選択することだって可能なのである。どれを選択したとしてもそこにいる自分は「自分」であり、その表現が他者には何事もなかったかのように「自分らしさ」としてうつる。非常に不思議なことのようにも思えるが、これが私たちの日常なのである。

おわりに

身体をおおうことで行為が成り立つ着装は、これが根源にあるために自分を隠し、同時に自分を装うことが可能になる行為であるといえるだろう。着装物で自分をおおうことはある意味では他者との間に壁を作るようなものなのかもしれない。この壁を作ることで他者との間に自分なりの距離をとり、よりよい接触をたもとうとするのである。自分をおおうことで何かに従う意思表示をすることもできるし、何かを表現することもできる。そして、ときには自分自身を隠すこともできるのである。

自分をおおうことができるのは着装だけではなく、今回扱ったレポートなどでも自分をおおっていることがわかる部分があったところで発見された。おおわれた部分は自分が欠点であると考えている部分が多く、これを隠すことができ、自分自身は満足しているようなところがあったかもしれない。しかし、おおってしまったことで自分が知らず知らずのうちに別の自分を作りあげていることになっていることも考えられよう。どれが本当の「自分」であるかという判断は実は当の本人である自分自身の頭を一番悩ませることになるのかもしれないが、その「自分」を見つけるための作業として、おおった部分をはがすことを試みることもひとつの策であると思われる。今回私がやったのはこの作業であり、おおわれた自分に目をやり、なぜこのようにおおうことになったのかという理由を考えながら徐々にはがしていく。そこではがされた自分はというと、よく知る自分でもあり、改めて知る自分でもあり、はがす行為の主体となった自分はこれらの自分に対して公平に目をむけるのである。この何ヶ月間、私は自分をはがす行為に没頭してきたわけだが、同時に普段は自分をおおった生活を繰り返しており、これは今後も続いていくものと考えられる。しかし、時には自分を見つめなおす意味を込めて、再び自分をはがしてみようかと思う。

参考文献 引用文献

- E.Goffman,1959,*The Presentation of Self in Everyday Life*,Doubleday & Company. (= 1974,石黒毅訳『行為と演技 日常生活における自己呈示』誠信書房.)
- G.H,Mead,1934, *Mind,Self,and Society*,The University of Chicago Press. (= 1973,稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店.)
- 林文俊, 1986,「集団規範と同調」対人行動研究会編『対人行動の心理学』誠信書房.
- 中村陽吉, 1990,『自己過程の社会心理学』東京大学出版会.
- 中野広, 1986,『女性の服装美と体型』繊維製品消費科学.
- 作田啓一・井上俊, 1986,『命題コレクション社会学』筑摩書房.
- Stone,G.P.,1962,*Human behavior social process*,Boston:Houghton-Mifflin Company
- Solomon,M,1987,Standard Issue,*Psychology Today* (December),30-31.
- 高木修・大坊郁夫・神山進, 1996,『被服と化粧の社会心理学』北大路書房.
- 高木修・神山進, 1994,『被服と身体装飾の社会心理学』北大路書房.

40 字 × 30 字 ・ 32 ページ 400 字詰め原稿用紙 ・ 82 枚

付録 今回使用した写真一覧



0-1



0-2



0-3



0-4



0-5



2-1



2-2



2-3



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



4-1



4-2



4-3



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



5-10



6-1



6-2



6-3



6-4



6-5



6-6



7-1



7-2



7-3



7-4



7-5



7-6



7-7



8-1



8-2



8-3



8-4



9-1



9-2



9-3



10-1



10-2



10-3



10-4



11-1



11-2



11-3



12-1



12-2



12-3



12-4



13-1



13-2



14-1



14-2



14-3



14-4



15-1



15-2



15-3



15-4



16-1



16-2



17-1



17-2



17-3



17-4



17-5



17-6



17-7



18-1



18-2



18-3



18-4



18-5



18-6



18-7



20-1



20-2



20-3



21-1



22-2



22-3



22-1



22-2



22-3



22-4



22-5



22-6



22-7